

GILLETTE & L'ORÉAL, WOMEN USA

VOL. IV

Missouri • Montana • Nebraska • Nevada
New Hampshire • New Jersey
New Mexico • New York



FERDINANDO FREGA ✨

GILLETTE & L'ORÉAL, WOMEN USA — VOL. IV

L'ORÉAL THROUGH GILLETTE · 12

ミズーリ、モンタナ、ネブラスカ、ネバダ、ニューハンプシャー、ニュージャージー、ニューメキシコ、ニューヨーク州。アメリカ横断の第四の行程。大平原から東海岸まで。

第0章 — 共通の序章

この序章は『*Women of the United States*』全6巻に共通している。ここでは全文を収め、シリーズを繰り返しなしに順に読めるよう、折りたためるようにしてある。

第0章

ここでは、世界は領土ではない。限界である。北極は迎え入れない。赦さない。誤りの余地を残さない。白が絶対の存在として君臨する。静かで、記憶をもたない。気温は気象データではない。捕食者だ。夜は何か月も続き、思考を押しつぶし、人の輪郭を歪め、意志を呑み込む。

共同体は少なく、小さく、閉じている。イヌイット、ユピック、北極の民は、誰も留まろうとは選ばない場所に暮らしている。ここでは一人ひとりが集団の生存に欠かせない。役に立たなければ、重荷になる。そして重荷になった者は、沈黙の中へ、雪の中へ、何ひとつ譲らない環境の論理の中へと消えていく。

科学基地は、もうひとつの種類の冷たさを加える。序列という冷たさだ。ここで女は稀な存在であり、適応するか屈するかしかない異物である。

この場所に「失踪」という概念は存在しない。あるのは、すべてを消し去る白だけだ。

イヌイットとユピックの女たち

北極の少女は甘やかされない。鍛えられる。寒さに、闇に、飢えに耐えることを早くから覚える。氏族の役に立たなければならぬ。ここでは、アイデンティティは個人のものではないからだ。それは機能である。女は家族と共同体の重荷を背負う。食べ物、火、子ども、毛皮、世話。権利について語る者はいない。脆さについて語る者もない。うつ病は存在するが、名前がない。暴力は存在するが、証人がいない。

科学基地の女

教育があり、有能で、規律に慣れている。研究者として、技術者として、医師としてやって来る。そしてすぐに知る。北極は資格を認めないことを。ここで意味をもつのは精神の強さだけだ。男たちの序列が彼女を支配し、弱さのわずかな兆しも弱さとして解釈される。強さだけでは足りない環境である。求められるのは極限の自制だ。

西洋から来た「よそ者」の女

自由の中で育ち、寒さを征服できると信じてやって来る。だがこの場所は彼女を打ち砕く。孤独、狭い空間、果てしない沈黙。基地は共同体ではない。機構である。そして男たちが設計した機構の中で、女は消えないために闘わなければならない。

世界の果てへの旅

隣人のアントニオ、通称ニーノは、何年も前からノールカップのこと、真夜中の太陽のこと、闇のない何か月ものことを話していた。それは彼がポケットにしまっていた夢だった。叶うはずのないもののよう。5月のある朝、私は彼の家の呼び鈴を鳴らし、

ただこう言った。「スーツケースに荷物を詰めてくれ。1時間後に戻る。帰りは30日後だ」。彼は驚き、うれしそうに私を見た。心配した彼の妻が、私たちの計画を尋ねた。「夢を追いかけに行くんです」と私は答えた。

私たちは車に乗り込んだ。妻たちは、正気を失った男たちを見るような目で私たちを見ていた。だがこの旅は本物だった。ニーノはもう質問だらけだった。「どこへ行くんだ？ 金はいくら持っていけばいい？」「落ち着いて」と私は言った。「54時間で着く。たった5000キロだ。新しいRange Roverに乗っているんだ。ドライブを楽しんでくれ」

300キロごとに車を止めなければならなかった。私より12歳年上の彼には、彼のリズムがあった。私には水と飲み物があり、彼にはコーヒーと体の用があった。そして先へ進むほど、彼は自分の人生について語った。あの果てしない道がなければ、私が決して知る事のなかったことを。

車の中に男が二人きりでいれば、話すのはいつも女のことだ。彼は妻しか知らなかった。私は笑った。そして安心させた。「私たちだって同じですよ」

60時間も運転してどうして正気でいられるのかと、彼は尋ねた。私はロシアの話をした。22歳のとき、一度も会ったことのない女に会うために51時間運転したことを。「距離は限界じゃない」と私は言った。「言い訳だ。私には言い訳なんてひとつもなかった」

白の中への到着

私たちはノルウェーに入った。道沿いの宿。車をそこに置き、櫓で先へ進むことになっていた。

ガイドは全身を覆い、何も読み取れなかった。ゴーグルを外したとき、女だとわかった。ノルウェーの女。無口で、率直で、氷の

ようだった。ニーノは櫓の真ん中、彼女が先頭、身長190センチの私が後ろで最後尾を務めた。

まだ明るかった。時計は時刻を示していたが、夜なのか朝なのかは教えてくれなかった。真夜中の太陽だった。私たちはノールカップにたどり着いたのだ。

ニーノは泣いた。私を抱きしめた。私は笑いながら言った。「気をつけて……ゲイだと思われるかもしれない」。私たちは笑った。だが、私たちは世界の果てにいた。

それから凍てつく寒さが来た。氷点下52度。

真の北極への入口

私たちは着替えのために金属のコンテナへ連れていかれた。ひどく重い、詰め物の入ったスーツで、複雑なファスナーで閉じるものだった。

私はガイドの代金を払った。ニーノは数人の男たちと一緒にイグルーに残され、私は別のイグルーに、ある家族と一緒に残された。70歳から80歳くらいの年老いた男と、30歳から50歳くらいの三人の女だった。

閉じた世界だった。単純で。残酷な。

男は脇に控えていた。女たちが暮らしを回していた。そしてトイレはイグルーから5メートル先の小山だった。うんちは地面に着く前に凍った。私の最初の小便は黄色い北極の星になった。北が私に挨拶していたのだ。

中年の女、マギは少しだけ英語を話した。あとは身振り、目、手。寒さの言葉だった。

私がスーツの使い方に迷っていると、彼女はためらいもなく私の股間に触れ、隠れたファスナーを教えてくれた。悪意はなく、恥じらいもなかった。ただの機能だった。生き延びるための。

イグルーでの三日間

彼女たちは食べ物を運んできた。燻製の魚、生の魚、タラの肝臓、クジラの腹肉。そしてサメの肉団子。選択肢はなかった。代わりもなかった。それが自然の与えるものだった。

それから私は飲んだ。赤い液体だった。ワインだと思った。濾して、煮立て、甘くしたクジラの血だった。私はそれを飲んだ。かつて感じたことのない力が湧いた。原初のエネルギー。コカインかと思った。違う。北が体の中に入ってきたのだ。

女たちは私を見ていた。老人は狩りに出かけた。私は休み、血を飲んだ。三日間、電話もインターネットもコンピューターもなく、ニーノもいなかった。ただ私と彼女たちだけ。

夜はなかった。あるのは光と、火と、氷と、息だけだった。

三人の女は横になって眠りについた。私は場所を探した。いちばん若い女が腕を上げ、もっと近くへ来るよう手招きした。三人はどっと笑い出した。私にはわからなかった。彼女たちは、私が自分たちの「クリスマス」なのだと言った。

受け入れられた、という意味の言い方だった。

感謝のしるしに少しお金を渡そうとした。彼女たちは断った。ただ抱擁がほしかった。そして、もっと身近に感じられるよう、カラブリア語で少しだけ言葉を。

そこで私は、本当の贈り物の価値を知った。買うことも売ることもできない贈り物の価値を。

ガイドとの別れ

三日後、ガイドがやって来た。彼女は三人の女と1時間話した。私は外にいた。何を話しているのかはわからなかった。私の知ることではなかった。それは彼女たちの言葉、彼女たちの世界、彼女たちの掟だった。

コンテナで私が服を脱いでいると、ガイドが入ってきた。好奇心にあふれ、率直で、北欧的だった。彼女は私を強く抱きしめた。私にキスをした。その肌はミルクのように白かった。その目は8月の空のように青かった。

彼女は、自分を連れ出してほしいと言った。あの世界から抜け出すためなら、何でもしただろう。

私は敬意をこめて微笑んだ。できなかった。すべきではなかった。

私が残したのは、ひとつの約束だけだった。「何か必要なことがあったら、手紙を書いてくれ。力になる」。彼女はお金さえ断った。美しい女だった。だが孤独だった。遠くからは見えない孤独。寒さが赦さない孤独。

帰郷

私たちはニーノを迎えに行った。彼は興奮しきっていた。帰りたくなかった。だが私には、彼の妻との約束があった。

彼はみんなに自分の三日間を語った。私は黙っていた。私は男には何ひとつ打ち明けたことがない。紙にだけだ。

そしてニーノが自分の世界へ戻っていくあいだに、私はもう別の世界へ向かっていた。別の目的地へ。別の出会いへ。

ようこそ。

エピローグ

北はあなたを奪わない。あなたを変える。そして決して

元のままのあなたを返しはしない。男たちは光を、沈黙を、写真を、夢を求めて北極へやって来る。女たちは生き延びるために留まる。

男たちは見たものを語る。女たちは生きたことについて沈黙する。

男たちは帰る。女たちは留まる。寒さの中に、雪の家に、誰にも聞かれない沈黙の中に留まる。彼女たちを讃えることのない共同体を支えるために留まる。子どもを、老人を、見知らぬ者を守るために留まる。見えないまま留まる。

私があそこから持ち帰った記憶はひとつだけだ。美しい、信じられないほど美しい、だが孤独な女。ロマンチックな意味ではない。人間的な意味で。悲劇的な意味で。

省察

北は体を殺さない。存在を殺す。そして残るのは白だ。女たちが生き、同時に消えていく場所。

だから私は書く。極限の場所は自らの物語を語らないからだ。そしてそこを旅する者には、沈黙しているという贅沢は許されない。

私は違う。私は違う。私の土地が私を生み、世界の残りは私を客としてではなく、家族の一員として迎えてくれる。

北の絶対の白から、私はアメリカ合衆国の絶対の混沌へと降りていった。

アメリカ合衆国

不可能な任務

アメリカの会社で18年働くと、世界のほかのどの会社も与えられないものが手に入る。仕事の文化、手順、明確な使命、そして理論ではなく日々の実践である価値の体系だ。彼らはそれを説明しない。あなたのために築き上げる。しかもあなたの許可を求めずに。

ニューヨークのオフィスにいたとき、想像もしなかった仕事を持ちかけられた。昇進ではない。異動でもない。実験だった。

アメリカ合衆国の内部で、人間関係のあるモデルを検証するために作られた極秘のプログラム。彼らを選んだのはマネージャーでも、心理学者でも、トレーナーでもなかった。現実の世界で、ある種の経験を積んだ人間を選んでいて。そして私の名前が挙がった。18年間ずっと営業にいたにもかかわらず。彼らが見ていたのは役職ではなかった。頭脳を見ていたのだ。

テストは説明するのは簡単で、やり遂げるのはきわめて難しかった。

1年でアメリカの50州を訪れること。都市は自分で選び、それぞれに少なくとも1週間滞在すること。

最後の2週間は強制的な休暇になる。費用はすべて彼らが持つ。私はただ生き、観察し、理解し、毎週月曜に報告書を出せばよかった。人間的で、乾いた、正確な報告を。

私は契約書に署名した。家に知らせた。家の者は何も尋ねなかった。毎月の仕送りが届いたかどうかを知りたがっただけだ。私はアメリカでの1年に立ち向かおうとしていた。彼らはいつものように、来月に立ち向かっていた。

念のため、私の給料はイタリアの銀行口座に直接振り込まれた。それは丁寧な言い方でこう告げていた。「ばかなことはするな。手持ちのもので暮らせ。おまえが本当は何者か、見せてもらおう」

15年後になってようやく、私は自分の報告書の原本、分析、そして彼らが私について集めた資料を見ることができた。この本はそこから生まれた。出版の承認は得た。ひとつの条件つきで。依頼した会社の名前を決して出さないこと。

かまわない。この物語はロゴの話ではない。自分で体験しなければ理解できない国にいる、ひとりの男の話だ。

いちばん遠い地点から始めるか？

論理的な選択は、中心ではなく周縁から始めることだった。理由は二つ、単純だ。

1. 実験を始めたばかりで、頭は冴え、注意力は最大だった。
2. 極端から始めれば、途中で針路を修正し、旅をきれいに終えることができる。

ボストンやシカゴから始める必要はなかった。境界から始めなければならなかった。書類の上でだけアメリカである場所から。

私はアラスカの州都、ジュノーを選んだ。孤立している。船か飛行機でしか行けない。誰のものでもない街。始めるには完璧な場所だった。

資源を最適化する

出発前に、私はアメリカ人が何より尊重することをした。観光客としてではなく、プロとして段取りを整えたのだ。

国内線網がいちばん大きい、最も人気のある航空会社三社に電話した。1時間もかからずに、国内線50便の回数券を60%引きで買った。

期限なし。日数の制限なし。制約なし。条件はひとつだけ。1年以内に使うこと。

ホテルチェーン、Uberタクシー、レンタカー会社とも同じことをし、それから行程の予定をきちんと組んだ。順番と手段は決めたが、日時は決めなかった。

準備はできた。

それが私の最初の本当の成功だった。動き方を知っているという最初のしるし。アメリカは待つ者ではなく、行動する者に報いる。

会社はその取引を見て、アメリカの文化がいつもすることをした。信頼性を確かめたのだ。

絶え間なく移動する1年を、私はやりくりできるのか。予想外の出来事に、距離に、緊急事態に対処できるのか。自立しているのか。

だから出発前に、もうひとつ決定的な点を片づけておいた。

クレジットカードに、毎月少なくとも10万ドルの利用限度額があるようにしたのだ。

使うためではなかった。それを管理できることを示すためだった。アメリカ人はこう考える。自律がなければ、自由はない。そして自由がなければ、評価されることもない。

その瞬間から、プログラムはもはや任務ではなかった。使命だった。

そして今、本当の旅が始まる

アラスカがアメリカ合衆国の一部なのは、地理の上でだけだ。そこは別の世界である。

女たちが跡形もなく消える場所。訴えが決して宛先に届かない場所。都市が、野蛮な大陸のただ中に浮かぶ文明の島にすぎない場所。

ジュノーは私の最初の試練だった。国のほかの地域とつながる道路が一本もない州都。アメリカらしさを感じさせないアメリカの一片。

ここで私はあることを理解しはじめた。この旅は地理の旅ではない。人間の旅になるのだと。

ブロック1 (第1巻)

アラバマ－アラスカ－アリゾナ－アーカンソー－カリフォルニア
－コロラド－コネチカット－デラウェア－フロリダ－ジョージア

ブロック2 (第2巻)

ハワイ－アイダホ－イリノイ－インディアナ－アイオワ－カンザ
ス－ケンタッキー－ルイジアナ－メイン－メリーランド

ブロック3 (第3巻)

マサチューセッツ－ミシガン－ミネソタ－ミシシッピ－ミズーリ
－モンタナ－ネブラスカ－ネバダ－ニューハンプシャー－ニュー
ジャージー－ニューメキシコ

ブロック4 (第4巻)

ニューヨーク－ワシントン

ブロック5 (第5巻)

ノースカロライナ－ノースダコタ－オハイオ－オクラホマ－オレ
ゴン－ペンシルベニア－ロードアイランド－サウスカロライナ

ブロック6 (第6巻)

サウスダコタ－テネシー－テキサス－ユタ－バーモント－バージ
ニア－ウェストバージニア－ウィスコンシン－ワイオミング

ミズーリ

ミズーリは矛盾に満ちた州だ。一方には穏やかな中西部があり、
もう一方には決して荒々しさをやめなかった南部がある。アメリ
カで最も分断された土地のひとつである。荒れた地区を抱えるセ
ントルイスとカンザスシティ、並行世界のように存在する白人の

郊外、貧しく動きの鈍い田園、そして多くを語りながらほとんど何も解決しない政治。

普通さが不調を覆い隠し、うわべの笑顔が深刻な問題を覆い、何ひとつ大丈夫でないときでさえ「すべて大丈夫」と言う州だ。

ここで女たちは爆発の中で消えるのではない。絶え間ない圧力の下で消える。家族、仕事、伝統、貧困、底に潜む暴力、脆い医療制度。

ミズーリは習慣によって女を消す。誰もが彼女に耐えることを期待する。そして彼女は、自分自身から消えてしまうまで耐える。

セントルイスの女 – 35歳

セントルイスは二つの世界に存在する街だ。ひとつは歴史に富み、もうひとつは暴力と放置と人種の不平等に閉じ込められている。

ここで女は三つの問題に同時に向き合う。－危険な地区－脆い学校－低い賃金。

彼女は街の欠かせない網の目の中で働く。－診療所－スーパーマーケット－介助－飲食業－基礎教育。

彼女は制度が支えきれないものを支えている。そして彼女がすべてを支えているあいだ、誰も彼女を支えない。

彼女の不在は都市的なものだ。日々のあらゆる危機をさばいているのは彼女なのに、街の再建に口を出す権利はない。

「完璧な」郊外の女 – 40歳

大都市の外には、非の打ちどころがないように見える郊外がある。清潔な通り、よい学校、整った家。

ここで女は貧しくはない。だが自由でもない。

保たなければならないもの。－高い家族のイメージ－申し分のない子ども－絶え間ない社交の顔出し－埋まりきった予定表－「汚れひとつない」結婚－決して落とすことのできない生活水準。圧力は静かで、絶え間ない。崩れることは許されない。速度を落とすことも許されない。脆さを見せることも許されない。

彼女の不在は精神的なものだ。彼女は人としてではなく、役割としてだけ存在している。

農村の女－49歳

ミズーリの田園はのろく、保守的で、閉じている。家と家は遠く離れ、サービスは最小限で、伝統は重い。

ここで女たちは、ほとんど変わらない世界に暮らしている。－不安定な仕事－乏しい医療へのアクセス－大家族－広がる依存症－社会生活を支配する教会－役割から抜け出す可能性はわずか。

選択のない義務の人生だ。問題があれば、自分で片づける。崩れても、誰も気づかない。

彼女の不在は地理的で文化的なものだ。彼女は距離と伝統の中に消えていく。

工業と肉体労働の女－37歳

ミズーリには中規模の工場が数多くある。倉庫、物流の調整、組み立てライン、製造工場。

ここで女たちは重い肉体労働をする。－梱包－生産ライン－夜勤－荷役－品質管理－調整の補助。

すり減った体、低い稼ぎ、無茶な勤務時間。州が必要としている仕事なのに、まったく見えない。彼女の不在は身体的なものだ。彼女は壊れ、助けに入ってくれる者は誰もいない。

エピローグ – ミズーリ

ミズーリは見せかけの普通さで栄える州だ。そして普通さの中で、女たちは自分を見失う。

彼女は難しい地区を、社交過剰な郊外を、過酷な工場を、のろい田園を切り盛りしている。

毎日が静かな闘いだ。そして静かな闘いこそ、最も破壊的である。

ミズーリは女たちを一撃で消し去りはしない。誰も問い直さない習慣で消し去る。

省察 – ミズーリ

この巻の州はそれぞれ、ひとつの種類の不在を見せる。ミズーリが見せるのは「静かな」不在だ。日常から、社会の期待から、誰にとってもすべてでなければならぬという重荷から生まれる不在。

ここで女たちは、あらゆる社会階層をつなぎとめる見えない接着剤だ。どこにでもいる。そしてまさにそれゆえに、誰にも見えない。

ミズーリが教えるのは、消し去るのに憎しみも対立もいらぬということだ。社会全体が、女たちはいつでもそこにいるものだと思ひ込めば、それで足りる。

だからこの章は欠かせない。普通さは、支えられなければ罌になるということを思い出すために。

モンタナ

モンタナは純粋な広大さだ。巨大な山々、果てしない道、果てしない森、孤立した家、肌を切り裂く冬。アメリカで最も美しい州のひとつである。そして最も暮らしにくい州のひとつでもある。

ここで女たちは対立のせいで消えるのではない。地理のせいで、孤立のせいで、田舎の考え方のせいで、心の孤独のせいで消える。沈黙が騒音より重い州だ。

モンタナは耐えることを求める。そして皆のために耐えなければならないのは、女たちだ。

僻地の女 – 51歳

ここでは、いちばん近い店から30キロ離れて暮らすこともある。いちばん近い診療所まで1時間。本物の病院まで2時間。

こうした地域に暮らす女たちが向き合うもの。－極度の寒さ－すぐには来ない助け－無視される健康の問題－手入れの必要な古い家－家族への全面的な責任－取り残されるという現実の恐怖。

彼女の不在は地理的なものだ。何も届かない場所に暮らしているから、彼女は消える。

牧場の家族の女 – 39歳

モンタナは牧畜で栄えている。牛、馬、大きな動物、そして肉体労働。

ここで女はすべてをこなす。－動物の世話を手伝う－皆のために料理する－帳簿をつける－車両を運転する－緊急事態に対処する－何もない土地の真ん中で子どもを育てる。

彼女は男のように働くが、「家族の一員」とみなされる。彼女の不在は経済的なものだ。価値を生み出しているのに、どこにも現れない。

小さな町の女 – 44歳

モンタナの小さな町では、時が止まっている。共同体は小さく、誰もが誰もを知り、誰も変わらない。

女はこうでなければならない。－母であること－頼れる存在であること－「醜聞を起こさない」こと－献身的であること－いつでも手が空いていること。

自分をつくり直すことはできない。文化の境界を越えることはできない。脆さを口にはすることはできない。

彼女の不在は社会的なものだ。彼女は自分自身のものではなく、共同体のものである。

自然観光で働く女－33歳

モンタナは公園、湖、そして近くのイエローストーンで観光客を引きつける。絵はがきの裏には、ホテル、レストラン、アウトドアの催し、保守、調整、清掃を回している女たちがいる。

きつい勤務、季節ごとの賃金、辺境での暮らし。安定はない。

彼女の不在は経済的なものだ。業界は彼女によって生きているのに、彼女は決して安らかに生きられない。

エピソード－モンタナ

モンタナは息をのむ自然と荒々しい孤独の混ざり合いだ。ここで女たちは距離の中に消えていく。物理的な距離、感情の距離、文化の距離。孤立した家を、牧場を、家族を、小さな町を、観光を支えているのは彼女たちだ。そして彼女たちが支えているあいだ、誰も見ていない。

省察－モンタナ

この巻の州はそれぞれ、ひとつの形の不在を見せる。モンタナが見せるのは、すべてを呑み込む地理が生み出す不在だ。

ここで女たちは、暴力や極度の貧困によって消されるのではない。何もない何マイルもの道によって、人を孤立させる冬によっ

て、変わらない文化によって、拒むことのできない役割によって消される。

ゆっくりとした、静かな消去だ。音を立てないからこそ、最も見分けにくい消去のひとつである。

ネブラスカ

ネブラスカは開けた、まっすぐな、平らな土地だ。広大な畑、絶え間ない風、果てしない空。外から見れば穏やか。内から見れば、孤立、のろさ、保守的な共同体、きつい農作業、そしてごくわずかな機会。

中西部と西部のあいだで暮らしながら、そのどちらの強みももたない州だ。

ここで女たちは混乱のせいで消えるのではない。重くのしかかる普通さのせいで、農業の繰り返しのせいで、変わらない役割のせいで、地理的な孤独のせいで消える。

ネブラスカは音を立てない。だが、すり減らす。

農場の女 - 40歳

ネブラスカの女は農場に欠かせない一部だ。－夜明けの起床－世話をする動物－皆の食事－家計の帳簿－見守る作物－家の手入れ－育てる子ども－突然の緊急事態。

彼女は男と同じだけ働き、しばしばそれ以上に働く。それなのに「無職」と記される。

彼女の不在は経済的なものだ。価値を生み出しているのに、統計の中には存在しない。

小さな町の女 – 46歳

数千人ほどの町。そこでは誰もが、誰についてもすべてを知っている。

女はこうでなければならない。－そばにいる母－安定した妻－立派な人物－教会で活動する者－共同体を支える者。

近道も、危機も、急な変化も許されない。他人が決めた固定の役割の中で生きている。

彼女の不在は文化的なものだ。居場所はあるが、声はない。

軽いサービス業で働く女 – 32歳

ネブラスカの都市――リンカーン、オマハ、グランドアイランド――では、女たちが日々の仕事をしている。

－レジ係－清掃－飲食業－学校の補助－老人ホーム－事務

低い賃金、分断されたシフト、見通しはない。彼女の不在は社会的なものだ。彼女がいなければ街は回らないのに、「発展」が語られるとき、誰も彼女に触れない。

距離の女 – 53歳

ネブラスカは、本物の町をひとつも見ずに2時間運転できる州だ。この距離が生き方になる。

都市の外に暮らす女が向き合うもの。－用事のたびの長い移動－乏しい医療－厳しい冬－孤立した家－単調な日常－本当の人のつながりはない。

彼女の不在は地理的なものだ。彼女はキロメートルの中に消えていく。

エピローグ－ネブラスカ

ネブラスカは単純に見える土地だ。だがその単純さはうわべだけである。

ここで女たちが消えていく先。－報われない農作業－閉じた共同体－極端な距離－サービスの欠如－硬直した役割。

土地と、伝統と、沈黙でできた不在だ。

省察－ネブラスカ

州はそれぞれ、ひとつの形の不在を見せる。ネブラスカが見せるのは、決して変わらない日常が築き上げる不在だ。

目に見える暴力はない。劇的な危機もない。あるのは繰り返される人生、認められない労苦、手放すことのできない役割だけだ。ネブラスカは、女たちがすべてをつなぎとめ、まさにそれゆえに見られることのない州である。

だからこの州はこの章に値する。最もありふれた消去とは、普通に見える消去だからだ。

ネバダ

ネバダは見かけの上に築かれた州だ。光、カジノ、ホテル、娯楽、観光、ギャンブル、果てしない夜の生活。世界が自由と過剰と可能性として受けとめるショーケース。

真実はその逆だ。

ネバダは、女の身体が最もたやすく使われ、搾取され、消費され、取り替えられる場所のひとつだ。女たちが消えるのは機会がないからではなく、その存在が商品のように扱われるからだ。

ここでの女の不在は、現代的で、醒めていて、意図されたものだ。優雅で、絶え間なく、きれいな消去。ありえない勤務時間、

夜勤、外見への圧力、すり減ったアイデンティティ、観光産業に押しつけられた役割でできている。

カジノとホテルの女 – 33歳

ラスベガスが栄えるのは、何千人もの女たちが回しているからにはかならない。－フロント－客室清掃－レストラン－バー－エンターテインメント－顧客サービス－調整業務－観光客向けコールセンター。

夜勤、つぶれる週末、存在しない休暇、絶え間ない圧力。女たちは、内側にもう力が残っていないときでさえ、完璧なイメージを保たなければならない。彼女の不在は身体的であり、心理的だ。彼女を人としてではなく「体験の一部」として使うシステムのなかで働いている。

夜の業界で働く女 – 29歳

夜のネバダは華やかではない。過酷だ。光と音楽と見世物のあいだで、人生が消費されていく。

－ホステス－ダンサー－バーテンダー－プロモーター－イメージと外見の存在感にかかわる役割

あなたの身体は契約の一部だ。それを保てなければ、一分であなたは取り替えられる。

彼女の不在は経済的であり、道德的だ。仕事が求めるのは彼女のイメージであって、彼女という人間ではない。

舞台裏を回す移民の女 – 41歳

巨大ホテルの裏には、何百人もの移民の女たちがいる。フィリピン、メキシコ、ハイチ、中米の女たち。

観光客に働く姿を見せてはならない仕事を、すべてこなすのは彼女たちだ。

－業務用の洗濯場－途切れない清掃－地下の厨房－巨大な倉庫－
夜の調整業務－フロアの準備

隠された人生。疲れた身体。非人間的なシフト。彼女の不在は構造的だ。欠かせない存在なのに、見えないものとして扱われる。

ラスベガスの外で暮らす女－52歳

ネバダは光だけではない。それを取り巻く砂漠でもある。小さな町、低い家並み、まばらなサービス、孤立した産業。

ここの女たちが向き合うのは、－手の届かない費用－限られた医療－交通手段の欠如－途方もない距離－厳しく、つながりの薄い共同体－限られた機会。

彼女は、世界がこの州に結びつけるものとは正反対の人生を送っている。

彼女の不在は地理的だ。彼女が暮らすのは光のネバダではなく、本当のネバダだ。

誰も彼女の話を話さない。

エピソード－ネバダ

ネバダはパフォーマンスの上に築かれた州だ。すべてはイメージと体験と娯楽だ。

女たちは、この機械を回す沈黙のエンジンだ。ホテル、カジノ、レストラン、娯楽、保守、調整。

それなのに、最も評価されないのは彼女たちだ。他人の夢を支えながら、過酷で、すり減らされ、見えない現実を生きているのは彼女たちだ。

ネバダは、彼女たちを使うのとまったく同じやり方で消していく。

省察 – ネバダ

どの州も、不在のひとつの顔を見せる。ネバダが見せるのは最も現代的な顔だ。経済的な機能にまで切り詰められた女たち。

それを消すのは貧困ではない。システムだ。

それは作られた不在だ。静かで、優雅で、機会のふりをしてい
る。女たちには千の可能性がある。だが、彼女たちを消費する方
法も千ある。

だからこそ、この章は決定的なのだ。光のなかでは、毎日その光
を灯している者がかえって見えにくくなるからだ。

ニューハンプシャー

ニューハンプシャーには自由と、森と、湖と、丘と、完璧な村
と、静かな道と、ほぼゼロの税金がある。外から見れば、ミニマ
リストの楽園だ。混沌もなく、騒音もなく、巨大都市もない。秩
序と自然だけ。

問題は、完全な自由がしばしば完全な孤独を意味することだ。

そして州が公共サービスに十分な投資をしなければ、その重荷は
そのまま人々の上に、とりわけ女たちの上に落ちてくる。

ここでの女の不在は悲劇ではない。孤立であり、硬直した文化的
慣習であり、家族の圧力であり、本当の社会的なつながりの欠如
だ。

ニューハンプシャーは攻撃しない。あなたをひとりにしておくだ
けだ。

小さな共同体の女 – 47歳

ニューハンプシャーの村では、すべてが穏やかに見える。すべて
が閉じている。

女はこうでなければならない。－頼りになる母親－尊敬される社会的存在－学校のボランティア－共同体に顔を出す人－土地の掟にかなう「いい人」。

間違えてはならない。規範から外れすぎてはならない。感情の危機を起こす余裕はない。

彼女の不在は文化的だ。役割はあるが、自由はない。

寒さと距離のなかで暮らす女－52歳

ニューハンプシャーは大きくはないが、孤立した地域と、離れ離れの家々と、冬には障害物になる道に満ちている。

ここの女が抱えて生きているのは、－何か月も続く雪－すべてを面倒にする距離－遅れて治療される健康問題－心の孤立－隙間を残さない家事の繰り返し－乏しい地域医療。

倒れたら、待つ。病気になったら、何マイルも車を走らせる。心が崩れても、誰も気づかない。

彼女の不在は地理的だ。彼女は沈黙と寒さのなかに消えていく。

欠かせない仕事－38歳

中規模の町－コンコード、マンチェスター、ナシュア－では、女たちが基本的なサービスを回している。

－学校－診療所－高齢者の介護－役所－初等教育－事務サービス
低い給料、給料よりはるかに大きな責任、絶え間ない感情の負担。

彼女の不在は実務的だ。福祉制度の残りを支えているのは彼女だが、州はその分野にほとんど投資しない。

欠かせないが、消耗させられる。

観光地で低賃金の仕事をする女 – 33歳

州の北部は観光で生きている。紅葉、湖、山、冬。

完璧な写真の裏には、こんな女たちがいる。－施設を掃除する－朝食を用意する－レストランで働く－B&Bを切り盛りする－部屋を片づける－最低限の保守をする。

忙しい季節と、空っぽの季節。不安定な経済。本当の保護はゼロ。

彼女の不在は経済的だ。すべては彼女の上で回っているのに、システムは彼女を取り替えのきくものと見なす。

エピローグ – ニューハンプシャー

ニューハンプシャーは整然として静かだ。だからこそ、女は音もなく消える。

消えていく先は、－伝統的な役割－閉じた共同体－物理的な距離－終わらない冬－足りないサービス－給料の安すぎる欠かせない仕事。

騒ぎはない。混沌もない。あるのは、当たり前になった孤独だけだ。

省察 – ニューハンプシャー

どの州も、異なる不在のかたちを示す。ニューハンプシャーが示すのは「完璧な」不在だ。礼儀正しく、清潔で、整然とした抹消。

ここでは女が共同体を治めているが、彼女を支える共同体はない。

それがニューイングランドの逆説だ。文明的であればあるほど、女がすべてを自分ひとりで片づけることを期待する。

だからこそ、この章は必要なのだ。一見「よい」州でさえ、暮らすにはひどい場所になりうることを思い出させるために。

ニュージャージー

ニュージャージーは境界の土地だ。つながっていて、せわしなく、物価が高く、通勤者であふれ、混じり合った家族、移民、荒れた地区、高級な郊外、忘れられた都市に満ちている。ここは「橋の向こう」のニューヨークではない。複雑で、ばらばらの州であり、女たちが、返すものより奪うもののほうが多いシステムを回している。

ここでの女の不在は、五つのきわめて過酷な要素から生まれる。－とうてい手の届かない生活費－見えない家事労働－消耗させる通勤－本物の緊張を抱えた多民族の共同体－しぶとく残る伝統的な家族の役割。

ニュージャージーは暴力で女を消すのではない。千の役目のあいだで存在し続ける努力によって消すのだ。

通勤する女－36歳

ニュージャージーは通勤の州だ。ニューヨークやフィラデルフィアへ通うために毎日何時間も失われる。遅れる電車、手に負えない渋滞、高い交通費、とんでもなく遅い帰宅。

この生活を送る女は「半分ずつ」生きている。－半分は職場－半分は公共交通機関－半分は家(皮肉なことに、家族の重荷の半分以上を背負っている)

彼女の不在は時間的だ。自分のための時間がない。何のための時間もない。

彼女は切れ端のなかに存在している。

サービス業の移民の女 – 42歳

(ラティーナ、ハイチ人、アフリカ人、フィリピン人)

ニュージャージーは移民の力で栄えている。ここの女は、州全体の舞台を支えている。－裕福な家の掃除－規制のないベビーシッター－レストランの厨房－老人ホーム－保守－低賃金の基本サービス

彼女は三つの問題に同時に向き合う。－低い賃金－きわめて高い家賃－途方もない家族への責任。

彼女の不在は経済的であり、言語的だ。働き、話し、適応する。それでもシステムの周縁にとどまる。

なくてはならないのに、いつでも取り替えられる。

荒れた地区の女 – 34歳

ニュージャージーは裕福な傲慢さだけではない。東部で最も問題を抱えた都市のいくつかがある。

－都市の暴力－予算不足の学校－失業－もろい医療－本当の地域サービスの欠如

ここで暮らす女が向き合うのは、－絶え間ない不安－不安定な仕事－非効率な交通－賃金に見合わない生活費。

彼女はひとり親家庭の柱であり、社会的なつながりの背骨であり、誰も彼女を救わないときにすべてを救う人だ。

彼女の不在は都市的であり、構造的だ。システムが崩れるとき、誰もその声を聞かない。

見栄の富の女 – 45歳

ニュージャージーのもうひとつの顔は、裕福な郊外だ。巨大な家、優秀な学校、整った住宅街。

この女たちは絶え間ない圧力のもとで暮らしている。－詰まった家族の予定－子どもたちの習い事－強いられたボランティア－非の打ちどころのない社会的イメージ－ステータスシンボルとしての結婚－途方もなく高い期待。

弱く見えてはならない。失敗してはならない。演技を中断してはならない。

彼女の不在はアイデンティティの問題だ。個人としてではなく、家族の機能として見られている。

エピローグ－ニュージャージー

ニュージャージーは、速すぎて、高すぎる暮らしをする州だ。本当にこの州を回しているのは女たちなのに、システムは彼女たちを使いながら消していく。

－通勤－見えない仕事－足りないサービス－危険な地区－競争の激しすぎる郊外－硬直した家族の役割－本当の支えのない多文化州は彼女たちのおかげで動いているのに、その努力に目を向けることは決してない。

省察－ニュージャージー

どの州も、何らかのかたちの不在を示す。ニュージャージーが示すのは、求めすぎて、返さなさすぎるシステムから生まれる不在だ。

それは仲介の州だ。権力の中心に近すぎて、その機会からは遠すぎる。ここでは、女たちは絶え間ない圧縮のなかで生きている。時間の、金の、エネルギーの、アイデンティティの圧縮。

ひとつの要因のせいではない。そのすべての合計だ。

そしてまさにそれが、ニュージャージーをこの巻の中心にしている。女の不在は、満ちた人生からも生まれうることを示している

のだ。自分のための場所以外は、すべてで満ちた人生から。

ニューメキシコ

ニューメキシコは、アメリカで最も魅惑的で、最も厳しい州のひとつだ。純粋な美しさ。広大な砂漠、赤い峡谷、先住民の共同体、古い文化、精神性、沈黙。だが、この力強い美の裏には、はるかに過酷な現実がある。

－歴史的な貧困－慢性的な依存症－弱い公共サービス－地理的な孤立－もろい学校－隠された家庭内暴力－国境を越える麻薬密売

ここは、女たちが偶然に消える州ではない。すべてが重くのしかかる土地に暮らしているから消えるのだ。距離、歴史、文化、貧困、閉じた共同体、不安定な仕事。

ニューメキシコは見捨てられた美しさだ。そしてその見捨てられたなかに、すべてを支えている女たちがいる。

プエブロの先住民の女－43歳

ニューメキシコには、アメリカ大陸で最大級の先住民人口がある。プエブロ、ナバホ、アパッチの女たち。

彼女は二つの世界のあいだで生きている。－古い伝統－彼女を無視する現代の国家。

彼女が向き合うのは、－予算不足の学校－最低限の医療－過密な住宅－低い賃金－基本サービスへの限られたアクセス－文化的・地理的な孤立。

大家族を、共同体まるごとを、重い責任を支えている。

彼女の不在は歴史的だ。この百年のあいだに、国家は彼女の民からすべてを奪い、ほとんど何も返さなかった。

貧しい地域のラティーナの女 – 35歳

ニューメキシコはアメリカ的である以上にラテン的だ。スペイン語はどこにでもあり、混じり合った家族がいて、きつい労働がある。

ラティーナの女たちは、州の舞台裏のいたるところにいる。－清掃－飲食－介助－軽い農作業－地元の店－共同体の支え。

きわめて低い賃金と上がり続ける物価のなかで暮らしている。多くの家族が崖っぷちにいる。書類がなければ、状況はさらにもろい。恐怖、見えなさ、本当の助けはない。

彼女の不在は経済的であり、政治的だ。懸命に働くのに、決して代表されない。

すべてから遠く離れて暮らす女 – 52歳

ニューメキシコは巨大だが、空っぽだ。ちっぽけな町、砂漠の家々、何時間も離れた都市。

この女が向き合うのは、－完全な孤独－遠い医療－ゼロの交通手段－厳しい冬、容赦ない夏－変わらない日課－わずかな仕事－まわりに広がる依存症。

倒れても、誰も来ない。医者が必要なら、何時間も車を走らせる。問題があれば、自分で片づける。

彼女の不在は地理的だ。彼女は空間のなかに消えていく。

観光・スピリチュアル業界で働く女 – 30歳

ニューメキシコは「スピリチュアル」な観光を引き寄せる。芸術、瞑想、砂漠、リトリート、先住民の文化。

詩的なイメージの裏には、経済を支える女たちがいる。－B&B－文化ガイド－ギャラリー－小さなレストラン－手工芸の店－季節のサービス。

不安定な業界だ。ハイシーズンには素晴らしい稼ぎがあり、ほかの月にはほとんど何もない。

彼女の不在は経済的だ。この土地の美しさは金を呼び込むが、そこに暮らす者のもとには残さない。

エピローグ – ニューメキシコ

ニューメキシコは二つの極のあいだに存在する州だ。絶対的な美しさと慢性的な貧困。深い精神性と政治の無関心。強い伝統と弱いサービス。

ここの女たちは、すべてを肩に担いでいる。先住民の共同体、ラテン系の家族、孤立した砂漠、芸術の町、最低限の仕事。

そして彼女たちが州を支えているあいだ、誰も彼女たちを支えない。

それは音を立てない不在だ。風景が美しすぎるからだ。そして美しさはすべてを覆い隠す。

省察 – ニューメキシコ

どの州も、異なる不在のかたちを示す。ニューメキシコが示すのは、距離と、解決されない歴史が生んだ不在だ。

ここでは、女はひとつの力によって消されるのではない。すべてが一緒になって彼女を消す。

– 地理 – 文化 – 伝統 – 貧困 – 孤立 – 家族の役割 – サービスの欠如
– 政治的な見えなさ

それは古い消去だ。ほとんど世襲の。

だからこそ、この章は決定的なのだ。ニューメキシコは時に忘れられた場所ではない。国家に忘れられた場所だ。そして女たちが毎日その代償を払っている。

ニューヨーク州

ニューヨークは都市ではない。身体への衝撃だ。あなたをつかみ、望まなくても引きずっていく波だ。許可を求めない存在だ。ここに足を踏み入れると、すぐにわかる。決めるのはあなたではない。ニューヨークが決めるのだ。

何百万もの人に囲まれながら、砂漠にいるよりも孤独を感じられる、世界で唯一の場所だ。あなたを見て、測り、値踏みし、消費し、ペースについていけなければ、振り返りもせずに置き去りにする都市だ。

ニューヨークはあなたを迎え入れない。値踏みする。

世界の首都であり、同時に見えないものの首都でもある。勝者だけを見せ、そのあらゆる一角を動かしている何千もの女たちを忘れる都市。誰も彼女を支えないのに、他人の人生を支えている女たちを。

ニューヨークはすべてが同時にある。暴力的にひけらかされる富と、もう声を持たない貧困。五年で顔を変える地区と、五十年変わらない地区。混じり合う言語、重なり合う文化、交差する身体、本当には決して言葉を交わさない人生。

絶え間ない移動の上に築かれた都市だ。満員の電車に乗っては降り、汚くてまぶしい通りを歩き、自分を浮かせておける仕事を探し、注文を届けに走り、診療所へ、学校へ、家へ、シフトへと、千の異なる方向へ動く。多くを約束してくれる土地だが、与えてくれるのは、あなたがむしり取ったものだけだ。

ニューヨークが動くのは、ほかの者が無視する破片をつなぎとめている女たちのおかげだ。摩天楼の上の階で働く女、下の階で床を磨く女、時間のない家族の子どもを育てる女、誰も見ようとしない地区で生き延びる女、すべてを求めておきながら、いつもあなたを中途半端なまま残す都市に立ち向かう女。

ここで女は、三つのレベルの圧力を同時に経験する。

1. ペースの圧力:

速度を落とせば、消える。ニューヨークは誰も待たないし、あなたのために例外もつくらない。

2. 費用の圧力:

ここではすべてが高すぎる。家も、時間も、エネルギーも、アイデンティティも。そして毎日が金の試練になる。

3. 存在の圧力:

いつもそこにいなければならない。耐えなければならない。機能しなければならない。持ちこたえなければならない。

だが、誰があなたを支えるのか？

ニューヨークは美しく、残酷だ。本物の機会を与えてくれるが、とてつもなく高い代償を求める。

この女は弱い存在ではない。毎日生き延びる機械だ。学校を、病院を、レストランを、清掃を、公共サービスを、交通を、家族を、摩天楼を、企業を、地区を前へ運んでいるのは彼女だ。

それなのに、この都市の物語のなかで、彼女の声は中心にない。背景だ。機能だ。必要だが、讃えられない。そこにいるが、聞かれない。

ニューヨークは、すべてを見せびらかす都市だ。本当に回している者たちを除いて。

だからこそ、この巻のなかで別の場所を占めている。ほかと同じような州ではない。アメリカのあらゆる女の不在が集まる地点だ。経済的な不在、文化的な不在、都市の不在、言語の不在、人種の不在、職業の不在、そして感情の不在。

うまくいくものと、うまくいかないもの、そのすべての縮図だ。

ここでは、女はどこにでもいる。それなのに一瞬で消えうる。彼女のペースが都市のペースより遅くなるだけで十分だ。

ニューヨークは大きいが、ひとりの女の人生の重さを収めるほど大きくはない。そしてこの章がそれを証明する。世界で最も有名な都市は、最も公正な都市ではない。最も目立つ都市にすぎない。そしてその日々の途方もない騒音のなかで、女は沈黙のうちに見失われていく。

マンハッタン

オリヴィア、39歳 – ミッドタウン、高層オフィス、せわしない暮らし

オリヴィアは7時10分に地下鉄に乗る。6番線、立ったまま、手には電話、目はもうメールの流れに釘づけた。

彼女はミッドタウンのガラス張りのビルの二十七階で働いている。誰も本当には説明できないサービスを売る会社のプロジェクトマネージャーだ。誰もが数字を、予測を、四半期目標を語る。誰も人間のことは語らない。

オリヴィアには六歳の娘がいて、母親と起きて過ごすのは一日二時間だ。朝は服を着せるため、夜は寝かしつけるため。残りは任せている。ベビーシッター、学校、放課後の習い事、短いメッセージ。

上司は彼女に「柔軟性」を求めるが、柔軟性はいつも一方通行だ。－長引く会議－時間外にかかってくる電話－でっちあげの緊急事態－「今夜中に」終わらせなければならないプロジェクト。

マンハッタンは機会の都市として売られている。オリヴィアにとっては、彼女の時間を盗み、それを宅配や、クリーニングや、有料サービスのかたちで売りつけてくる都市だ。

夜、オフィスを出ると、ビルの明かりが嘲笑のように見える。すべてがきらめいている。彼女の人生を除いて。

オリヴィアの不在は安くはない。時間を食う不在だ。彼女はどこにでもいる。いちばん大事な場所を除いて。

私、ナンドは、速度を落とす余裕のない者の早足で3番街を渡っていく彼女を見ると、ひとつの単純なことを見る。決して自分を支えてはくれない都市を支えている、ひとりの女を。

— ナンド

ブルックリン

アイシャ、31歳 – ベッドフォード・スタイベサント、逆向きのジェントリフィケーション

アイシャは、歴史的に黒人の地区であるベッドスタイで生まれた。ラップ、歴史、家族、教会、夏の歩道のバーベキュー。

やがて「アーティスト」たちが来た。投資家が来た。新しいコーヒーショップ、リードにつながれた血統書つきの犬、筋の通らない値上がり。いつもの筋書きだ。

アイシャは地元の公立学校で働いている。生徒たちは、毎年立ち退きに直面する家族の子どもだ。子どもの頃の同級生の多くは、「再開発」計画に押し出されて、もうそこには住んでいない。

彼女は教え、耳を傾け、もめごとをおさめ、守る。昼は教師であり、心理士であり、姉であり、防壁だ。夜は借りている台所のテーブルで宿題を採点しながら、いつかこの家の家賃を払えなくなるのではないかと不安になる。

都市はブルックリンを「クール」だと讃える。アイシャには「クール」でいる時間などない。生き延びなければならないのだ。

彼女の不在は都市的であり、政治的だ。誰もが投機の対象にする地区で、本当に耳を傾けられないのは彼女だけだ。

— ナンド クイーンズ

マリア・フェルナンダ、42歳 – ジャクソンハイツ、三つの世界をひとつに

ひとつの身体に

マリア・フェルナンダはエクアドルの出身だ。クイーンズのジャクソンハイツに住んでいる。ひとつの区画で十の異なる言語が話され、そのどれもが権力の言語ではない場所。

夜はマンハッタンのオフィスの清掃をし、昼は必要なときにベビーシッターをする。眠りは時間単位の贅沢だ。

子どもが二人いる。ひとりキトで、ひとはニューヨークで生まれた。上の子は、どうしていつも家にいないのかと尋ねる。下の子は、母親とはいつも急いでいるものだと思っている。

マリアはエクアドルに残った母親に送金している。二つの大陸を支えている。ひとつの身体で。

彼女の人生は絶え間ない往復だ。クイーンズ → マンハッタン → クイーンズ。遅い電車、重い鞆、疲れた脚。

誰も本当には彼女を見ていない。彼女が世話をするアメリカ人の女の子の両親にとって、彼女は「メアリー」だ。清掃の同僚にとっては「決して止まらないあの人」だ。

彼女の不在は言語的であり、社会的だ。働くニューヨークを動かしているのに、どの公式の物語にも属していない。

私、ナンドは、ある日曜の朝、ルーズベルト・アベニューで彼女に出会い、ただひとつのことを考える。この国が立っていられる

のは、彼女のような女たちが倒れさせないからにすぎない。 — ナンド

ブロンクス

キーシャ、29歳 – サウス・ブロンクス、毎日の抵抗

キーシャはサウス・ブロンクスに住んでいる。古びた建物、頻繁なサイレン、安売りの店、壊れた歩道で遊ぶ子どもたち。

彼女はひとりで二人の子どもを育てている。父親は何年も前に、約束と謝罪のあいだに消えた。

スーパーマーケットで夜のシフトに入っている。 – 速いレジ – 苛立った客 – 一分ごとに確認するマネージャー – 決して足りない給料。

昼は走り回る。 – 子どもたちを学校へ連れていく – 先生と話す – 補助金を扱う窓口と言い争う – ドルずつ数えながら買い物をする。

自分のことを考える時間はない。わかっているのは、あの二人の子どもを立たせておかねばならないということだけだ。

ブロンクスは今も問題として描かれる。キーシャは誰も認めない解決策だ。政治家が背景としてしか使わない地区を支えている母親だ。

彼女の不在は構造的だ。起きることすべての中心にいるのに、システムにとって彼女は存在しない。

— ナンド

スタテンアイランド

ジーナ、45歳 – 二つの都市のあいだの见えない通勤者

ジーナはスタテンアイランドに住んでいる。マンハッタンの保険会社のオフィスで働いている。毎日、同じ日課だ。

ーバスーフェリーー地下鉄ーオフィスーそしてすべてを逆にたどって振り出しへ。

マンハッタンの住人にとって、スタテンアイランドはほとんど存在しない。地図の突起、山のいちばん下。だがジーナにとっては家だ。そして同時に檻でもある。

仕事を変えたいが、まともな機会はどれも遠い。子どもたちのための時間をもっと欲しいが、それを交通に差し出している。毎晩疲れ果てていたくはないが、この都市は、その外れに暮らす者に優しくない。

彼女の不在は時間的であり、空間的でもある。彼女を孤立させる場所に暮らし、彼女を使う場所で働いている。

私、ナンドは、フェリーの上に立つ彼女を思い浮かべる。手にはコーヒーのカップ、目はスカイラインのなかに迷い込んでいる。目の前にはニューヨーク。彼女の人生は、その途中にある。

ー ナンド

ウォール街

レイチェル、37歳 – 崩れることを許されない女。

レイチェルは金融業界で働いている。凡庸でいる贅沢はない。あの環境では。女としては。

速く話すことを、口調を決して間違えないことを、ためらいを決して見せないことを覚えた。崩れることは誰にも許されない。だが女が崩れれば、一生の烙印になる。

日々は機械だ。数字、グラフ、電話、会議、連鎖するメール、ビジネスディナー、あまりに急いで下される、あまりに重い結果をとまなう決定。

家に帰ると、空っぽだ。悲しいのではない。空っぽなのだ。仕事の外に何かを築く力がない。中途半端な関係、壊れた友情、遠い家族。

ニューヨークは、会議で、エンパワーメントのイベントで、パネルディスカッションで、ウォール街での女の成功に拍手を送る。そしてマイクが切れたとたん、すべてが元どおりになる。

彼女の不在は感情的だ。決定が下されるあらゆる部屋に彼女はいる。だが、そこに座るために自分の一部を手放さなければならなかった。

この物語に教訓はない。開いたままの楽譜があるだけだ。

ー ナンド

ラティーナのナニー

ドロレス、54歳 – アッパー・イースト・サイド、他人の子どもを育てる。

ドロレスはメキシコから来た。ニューヨークに住んで二十年になる。二十年間、決して自分のものにはならない家々に通いつけている。

彼女はアッパー・イースト・サイドで働いている。巨大なアパートメント、ドアマン、静かなエレベーター、クイーンズにある彼女の一寝室の部屋全体より大きな台所。彼女を「ほとんど家族」と見なす家で、四人の子どもを育てた。「ほとんど」。すべてを語る言葉だ。

彼女は子どもたちが最初の一步を踏み出すのを見た。泣き声を聞き、涙をふき、おやつを用意し、学校へ送り、午後の様子を撮影

し、打ち明け話を聞いた。

その子どもたちが大きくなると、出ていく。ドロレスは残る。

その夜、彼女は遅く帰宅する。血のつながった息子は、もう大人になったが、今も彼女にある種の敬意を抱いている。恨みの混じった敬意だ。子どもの頃、彼はほとんど母親に会えなかった。彼女はほかの子どもたちの母親をするので忙しかった。

彼女の不在は二重だ。他人の人生にはいる母親、自分の家族にはいない母親。

そしてアメリカは、そのすべてをひとつのフレーズでまとめる。
「それが仕事だから」

— ナンド

ホームレスの女

モニーク、51歳 – ミッドタウン、何百万人のなかで見えない

モニークは眠れるところで眠る。シェルターのときもあれば、閉まった店のショーウィンドウの前の段ボールの上のときもあり、どこかの地下鉄の駅の椅子の上のときもある。

昔は、家があり、パートナーがいて、仕事があった。それから、いつもの螺旋。病气、借金、失業、心の崩壊、すぎる相手は誰もいない。彼女は黒人で、五十歳を過ぎ、路上で過ごす冬のたびに担いでいく身体を持っている。

朝、都市が仕事へ急ぐあいだ、彼女はそこにいる。同じ通り、同じ角、誰も合わせようとしない同じまなざし。

彼女の不在は完全だ。システムにとって、彼女はもう何ものでもない。労働者でもなく、消費者でもなく、「役に立つ」存在でもない。だから存在しない。

私、ナンドは、ニューヨークで路上の女を見るたびに、同じ容赦ない問いを自分に投げかける。彼女がここに行き着くまでに、国家はいくつの段階を飛ばさなければならなかったのか？

答えはいつも同じだ。多すぎる。ナンド

大病院

ソフィア、34歳 – 二つのシフトのあいだの看護師、そして

息もつけない

ソフィアは、まだ多くの人が眠っている時間に病院に入る。シフトは午前7時から午後7時まで。すべてがうまくいけば。というのも、いくつかの病棟では「すべてがうまくいけば」など存在しないからだ。

彼女はマンハッタンの大病院で働いている。終わりのない廊下、ネオンの明かり、アラーム、モニター、かすれた声、機械につながれた身体、質問する家族、急いで通り過ぎる医師たち。

ソフィアには崩れる余裕がない。あらゆる行動に結果がともなう。あらゆる不注意が重くのしかかる。

シフトが終わっても、彼女のなかにはまだ残っている。－終わらない物語－忘れられないまなざし－ささやくように伝えなければならなかった知らせ－誰にも取り去ることのできない責任。病院の外では、ニューヨークは何事もないかのように走っている。なかでは、彼女が都市の最ももろい部分を支えている。

彼女の不在は感情的であり、制度的でもある。医療制度の中心にいるのに、その声は彼女の耐える力ほどには重んじられない。

私、ナンドは、制服を着た女たちがシフトを終えて疲れ果てて出てくるのを見ながら、ひとつの単純なことを理解する。もしある日、彼女たちが全員そろって止まると決めたら、この都市は48時間で崩壊するだろう。

— ナンド

レストラン

ジュリア、27歳 – ロウアー・イースト・サイド、皿と、テーブルと、押しつぶされた

尊厳

ジュリアはイタリア系アメリカ人だ。ただし、本物のイタリア人がもう知らないニューヨークの。絵葉書のリトル・イタリーではなく、ロウアー・イースト・サイドのレストランでの終わりのないシフトだ。

彼女はウェイトレスだが、はるかに多くのことをしている。－即席の心理士－苛立った客の避雷針－厨房とホールのあいだの緩衝材－見せびらかすための外見の存在－いつもまっすぐな身体、いつも浮かべた笑顔

チップが、その週が暮らせる週になるか、ひと息つくだけの週になるかを決める。基本給はばかげている。この業界ではいつものことだ。

夜の終わりに、人は彼女にいちばん愚かな質問をする。「で、本当は何をして暮らしているの？」

まるでそれが「本当の」仕事ではないかのように。彼女の不在は社会的だ。腹が減ったときは誰もが彼女を必要とするのに、権利の話になると誰も彼女を考慮しない。

私、ナンドは、テーブルに座って金を払うだけで自分のほうが価値があると思っている者より、ホールで八時間のシフトをこなせる女のほうに、ずっと敬意を抱いている。

— ナンド

クリエイティブ業界

リア、36歳 – ブルックリン、決して止められないクリエイター

その頭を。

リアはブルックリンとマンハッタンにある制作会社で、ライター兼プロデューサーとして働いている。シリーズ、キャンペーン、コンテンツ。いつも何かを考え出さなければならず、いつも誰かを説得しなければならず、いつもばかげた締め切りがある。

新しいプロジェクトの発表パーティーでは、誰もが「ビジョン」や「ストーリーテリング」や「新しい物語」を語る。眠れない夜のことも、終わりのない修正のことも、盗まれたアイデアのことも、「仕事への情熱」に偽装された燃え尽きのことも、誰も語らない。

リアはブッシュウィックのシェアアパートに住んでいる。「キャリアを築いた」のかもしれないが、この都市の物価が、どんな昇進も食いつぶしていく。

彼女の不在は職業的だ。ニューヨークは創造性を自由として売るが、彼女の創造性は予算に、電話に、ばかげた要求に、絶え間ない圧力に縛られている。

彼女は想像力を生み出す。それを金に換えるのはほかの者たちだ。

— ナンド

切れ切れのフリーランス

プリヤ、33歳 – 三つの仕事、安定はゼロ

プリヤはインド人の両親のもと、クイーンズで生まれた。教育があり、頭はアイデアでいっぱいだが、ニューヨークの労働市場は彼女にはっきりしたパッケージを手渡した。一生フリーランス。

彼女を「外部協力者」と呼ぶ代理店のためにグラフィックデザインをし、決して彼女の名前を出さないブランドのためにコンテンツを書き、ときどき家賃を稼ぐための短い講座を教えている。

休暇もなく、病気休暇もなく、ボーナスもなく、保証されたものは何もない。あるのは責任だけだ。

昼は仕事を納める。夜はメールを確認し、また「明日までに奇跡が必要です」が来ないことを祈る。

この都市は好んでこう言う。「ここでは、才能があれば成功できる」。だが真実は違う。ここでは、才能があれば、何も残らなくなるまで搾り取られる。

彼女の不在は契約上のものだ。コミュニケーションの断片を、キャンペーンを、プロジェクトを担っているのに、書類の上ではいつも「外注」だ。

私、ナンドは、あなたのような人の顔に、その罨をはっきりと見る。満ちた仕事、空っぽの人生。

ー ナンド

公営住宅

ターニャ、44歳 – イースト・ハーレム、母親、世話役、標的

ターニャはイースト・ハーレムの公営住宅に住んでいる。建物は古く、手入れが行き届かず、エレベーターはしょっちゅう壊れ、階段はすり減っている。

三人の子どもの母親だ。地元の学校でアシスタントとして働いている。家賃は安いが、本当の代償は別のところにある。国家がもう自分のものと見なしていない場所に暮らすことだ。

毎日、こんなものに分けられている。－仕事－学校の面談－助けなければならない隣人－補助金のための役所仕事－複雑な環境

で育つ子どもたちへの不安 – 口論、警察、サイレンの音。

彼女の不在は政治的だ。彼女の地区が存在するのは、「社会問題」を語るための写真が必要なきだけだ。

そのあいだ、地区を生かしているのは彼女であり、彼女のような女たちだ。あらゆるものに対する壁として機能している女たちだ。

ニューヨークは開発を、再生を、投資を語る。だが、ある種の建物の階段をのぼると、その多くが何年も前から見捨てられていることに気づく。

— ナンド

家庭内暴力

ローザ、38歳、クイーンズ、恐怖と書類のあいだに閉じ込められて。

ローザはドミニカ共和国の出身だ。クイーンズの果てしなく続く一角にあるシェアアパートに住んでいる。

夫は働いたり働かなかったりで、その日々はこう入れ替わる。謝る日、怒鳴る日、突き飛ばす日、殴る日。ローザが出ていけないのには三つの理由がある。– 怖い – 金がない – この国にとどまる許可を失うのが怖い。

夜、彼が眠っているあいだ、彼女は何も起きていないふりをする。朝、あざを隠すために化粧をし、コインランドリーへ働きに行く。

システムは彼女に言う。「電話して、助けを求めて、逃げなさい」。だが現実はもっと汚い。満員のシェルター、順番待ちのリスト、手いっぱいのソーシャルワーカー、わずかな本当の保護。

彼女の不在は法的だ。法律と、書類と、恐怖と、選択肢のなさが作る空白に閉じ込められている。

私、ナンドは外から見ていて、知っている。「出ていきたければ、出ていける」という言葉は、この世界がこれまでに発明したなかで最も偽りに満ち、最も卑怯な言葉のひとつだ。

— ナンド

超正統派の地区

ハヤ、29歳 – ボロー・パーク、生まれる前に決められた人生。

ハヤはブルックリンのボロー・パークに住んでいる。超正統派ユダヤ教徒の地区だ。厳しい規則、閉じた共同体、割り当てられた役割。

彼女の人生は、彼女が意見を持つことさえできないうちに決められた。－ひどく若い結婚－大勢の子ども－本当の自立はない－中心にある宗教の学び－脅威と見なされる外の世界。

彼女の一日は満ちている。家、子ども、買い物、料理、儀式、絶え間ない頼みごと。本当の静けさの瞬間は決してなく、自分だけの場所も決してない。ハヤには口にできない考えがある。尋ねられない問いがある。外に何があるのかという予感はあるが、そこへ行くための地図はない。

彼女の不在は文化的であり、精神的だ。彼女の世界のあらゆる仕草のなかにいるのに、その構造から切り離されたひとりの個人としては存在できない。

ニューヨークは多様性に拍手を送るが、ほかの人の邪魔にならないかぎり、一部の女たちが「見えない」文化の檻のなかで暮らすことを喜んで受け入れる。

— ナンド

ネイルサロン

リー・メイ、41歳 – フラッシング、完璧な手、消耗した人生

リー・メイはクイーンズのフラッシングにあるネイルサロンで働いている。客のあとに客、爪のあとに爪、除光液のにおい、マスク、丸まった背中。

十年以上前に中国から来た。仕事はすぐに見つかった。現金払い、長いシフト、余計な質問はなし。

週六日、一日十時間働く。ときにはそれ以上。

客にとって、彼女は店の付属品だ。「黙って上手に爪をやってくれる人」。

誰も自分に問わない。－彼女のポケットにいくら残るのか－どれほど頻繁に化学物質を吸い込んでいるのか－健康保険はあるのか－夜、痛みなしに眠れるのか。彼女の不在は化学的であり、社会的だ。ネオンの明かりの下で、他人の手を美しくしながら、ゆっくりとすり減っていく。そのあいだ、彼女自身の手がどうなっているかには誰も気づかない。

私、ナンドは、夜に店を閉めて金を数える彼女を思い浮かべる。利益ではない。余白だ。浮いていられるか、もう少し深く沈むかの差だ。

－ ナンド

夜の女

ジャスミン、28歳 – タイムズスクエア、まぶしい光、もろい人生

ジャスミンは真夜中を過ぎてから息づくクラブで働いている。芸術のために踊っているのではない。生き延びるために踊っている。

長いシフト、暗い廊下、笑いすぎるマネージャー、サービスを権利と取り違える客。

彼女はどこにも書かれていない十の規則を覚えた。－笑う－信用しない－ひとりにならない－差し出された飲み物は飲まない－恐怖を見せない－目を開けておく－友達をつくらない－どんな約束も信じない－立ち止まらない－遅い時間にひとりで帰らない。

毎晩が、見えない糸の上の綱渡りだ。誰も彼女を守らない。クラブも、警察も、都市も。

彼女の不在は道德的だ。誰もが彼女の存在を知っているのに、誰も彼女を労働者として認めようとしない。

私、ナンドは、夜明けにクラブから出てくる女の子たちを見ると、知っている。強さは華やかなものではない。生き延びることだ。－ナンド 配達の女 カーラ、30歳－クイーンズ→マンハッタン、雨、雪、暑さ、いつも路上にカーラは自転車で働いている。背中には保温バッグ、ハンドルには電話、すべてを決めるアプリ。－ルート－報酬－時間－ペナルティ－次の注文 彼女はシステムの「スマートな」部分だ。誰も見ようとしない部分だ。車を、タクシーを、穴ぼこを、容赦ない信号をすり抜けていく。雨のなかを、雪のなかを、顔を凍らせる風のなかをこぐ。すべては、一滴ずつ届けられる数ドルのためだ。その夜、彼女は疲れ果てて家に帰る。保護もなく、安全もなく、保険もない。彼女の不在はデジタルだ。アプリのなかにしか存在しない。外には存在しない。－ナンド クイーンズの奥のシングルマザー エリカ、33歳－ファー・ロッカウェイ、海と、距離と、貧困のあいだでファー・ロッカウェイはニューヨークだが、必ずしもそうではない。遠く、切り離され、忘れられている。都市が統計のためだけに使う地域だ。エリカはそこで二人の子どもと暮らしている。スーパーマーケットで働いている。毎日、できることをする。

－子どもたちを起こす－服を着せる－朝食をつくる－学校へ連れていく－職場へ走る－客と、はかりと、レジをさばく－とんでもなく長いバスに乗って家に帰る－料理する－掃除する－すべてを片づける

彼女は三つの人生を持つ母親だ。自分の人生、子どもたちの人生、そして地区の人生。

彼女の不在は地理的だ。遠すぎて、見てもらえない場所に暮らしている。

私、ナンドは、地図と距離を見て、ひとつのことを知っている。ファー・ロッカウェイに暮らす者は、毎日、見えないハンディキャップとともに生きている。

－ ナンド

ブルックリンの黒人コミュニティの女

ラトーヤ、40歳－ブラウズビル、生き延びるための日課

ブラウズビルはニューヨークで最も傷ついた地区のひとつだ。古くからの貧困、乏しいサービス、放置された学校。

ラトーヤには仕事が二つある。朝は学校で、夜は老人ホームで。

彼女の一日は決して終わらない。時間割がない。余白がない。休息がない。

毎月、何から払うかを決めなければならない。家賃か?請求書か?食べ物か?交通費か?薬か?

彼女の不在は人種的だ。自らを「進歩的」と呼びたがる都市で、貧しい地区の黒人女性は最後に消え、ネットに投稿される悲劇があるときにだけ、ふたたび見えるようになる。－ ナンド テックの女 ハンナ、29歳－マンハッタン、スタートアップ、不安、圧力、見せかけ ハンナは「多様性」「インクルージョン」「未来」

「新しいリーダーシップ」を語るテック系スタートアップで働いている。そして実際には、－トップにいるのは男－決定するのは男－プロジェクトを率いるのは男－資金を受け取るのは男。ハンナは見えない仕事をすべてこなす。段取り、編集、プレゼン、顧客対応、緊急事態への対応。彼女は優秀だ。優秀すぎて、誰もが彼女を利用する。不安と燃え尽きのために、一年前からセラピーに通っている。彼女の不在は文化的だ。テックは現代的だと言い張るが、内側は古い。私、ナンドは理解した。「新しい世界」は、それを治める者たちが変わるまで変わらない。－ナンド書類のない移民 ヤリッツァ、26歳－ブロンクス、どこででも働き、隠れて暮らす。ヤリッツァは国家にとって存在しない。だから、国家も彼女にとって存在しない。彼女は三つの風変わりな場所で働いている。－アパートの建物の清掃－デリでの調理－必要なときのベビーシッター。

支払いは現金だ。安全もなく。保護もなく。権利もない。

彼女は警察が怖く、移民局が怖く、家主が怖く、一本の通報が自分を永遠に消してしまうのが怖い。

彼女の不在は法的だ。二つの世界のあいだの隙間で生きている。必要とされているのに、認められていない。

－ナンド

逃げる移民の女

マハ、37歳、アストリアから、強制結婚から逃れて。

マハは二年前に中東から来た。暴力をふるう夫を、彼女の自由を望まなかった家族を、女が自分のことを自分で決めるのを許さない文化を、後に残してきた。

ニューヨークでは、アストリアのシェアルームに住んでいる。食料品店で働いている。夜は電話で動画を見ながら英語を覚えている。

彼女は内に古い恐怖を抱えている。家族の誰かが自分を見つけるのではないか。すべてが元に戻るのではないか。自由が終わるのではないか。彼女の不在は情緒的だ。半分だけ存在している。片足は新しい人生に、もう片足は永遠の逃走のなかに。

ニューヨークは彼女に、消える機会を与えた。今、彼女は存在することを学ばなければならない。

— ナンド

何マイルもの道と、地下鉄と、騒音と、競走の女

エレナ、50歳 – マンハッタン、むさぼり食う都市で過ごした人生。

エレナはこの都市に三十年以上住んでいる。地区が、建物が、店が、顔が変わっていくのを見てきた。友人たちが去り、同僚たちが職を失い、家族が壊れていくのを見てきた。

彼女は残った。

デパートで主任として働いている。長いシフト、重い責任、絶え間ない圧力。チームを率い、客をさばき、だめになるはずだった日々を救う。

エレナこそ本当のニューヨークだ。映画には出てこないニューヨーク。システムを回しているニューヨーク。文句は言わないが、あらゆる打撃を感じているニューヨーク。

彼女の不在は実存的だ。都市にすべてを捧げ、都市が彼女に返したのは耐える力だけだった。

私、ナンドは、ここに二十年暮らしてきた女たちに会うとき、どんな観光客にも決してわからないことを理解する。ニューヨークに暮らすことは、ゆっくりとした戦争だ。そして残る者たちは、祝うこともなく毎日勝っている。

— ナンド

エピソード

ニューヨークは見られることを求める都市だが、決して本当には見ない。頼んでもいない選挙のようにあなたのなかに入ってくる場所だ。受け入れるか、押しつぶされるか。

この完璧な混沌のなかで、女たちはすべてをつなぎとめる見えない軸だ。電車に、厨房に、病院に、学校に、摩天楼に、倉庫に、権力が決して足を踏み入れない地区にいる。どこにでもいるのに、必要なときにしか気かけられない。

都市は人生そのものより速く走り、その競走のなかで、本当に都市を支えている者たちを消費していく。ニューヨークはすべてを約束する。成功、機会、救い。そして口にしない代償を求める。

真実は単純だ。世界で最も有名な都市は、決して表紙を飾ることのない女たちの背中の上で栄えている。

この章は、彼女たちを水面へ引き戻す。ひとりずつ。物語ごとに。フィルターなしで。美化せずに。背筋を伸ばして。あらゆる人生がそれに値するように。何百万もの他人の重さを担いながら無視されている人生が。

省察

この巻のどの州も、ひとつの種類の不在を示す。ニューヨークはそのすべてを含んでいる。ここでは女の不在は全面的で、何倍にもなっている。－時間の不在－保護の不在－心の余白の不在－承認の不在－耳を傾けられることの不在－休息の不在－自立したアイデンティティの不在－与えたものへの見返りの不在。

自由という考えを売る都市は、何千もの女たちに、彼女たちのために設計されていないシステムのなかで生き延びることを強い

る、その同じ都市だ。欠かせないのに、使い捨てにされる。そこにいるのに、見えない。エンジンなのに、物語ではない。

ニューヨークでは、どの女も異なる戦いに向き合っている。だが全員が同じ地面を共有している。彼女たちの苦闘を前にしても、止まることのない都市を。

だからこそ、これらのページは必要なのだ。ニューヨークはスカイラインや、芸術や、文化や、成功だけではない。不在でもある。女の不在。最も避けられ、最も本物で、最も絶え間ない不在。

個人的な覚え書き

ニューヨークは私の家だ。そして私の家だからこそ、その嘘を許さない。

観光客や、新聞や、テレビドラマや、他人の夢が見る都市を描くことには興味がない。私が興味を持つのは、息をし、血を流し、壊れ、毎日本物の人々の肩の上で自らを建て直す都市だ。

ひとつのことを決定的に理解するには十分なものを見てきた。この女たちは二倍を支え、半分しか受け取らない。弱いからではなく、都市が彼女たちの強さに慣れてしまったからだ。そして世界があなたの強さに慣れると、あなたを守るのをやめる。私、ナンドがこれらの物語を書いたのは、このすべてが沈黙のうちに見過ごされることを受け入れられないからだ。この機械全体を動かしている者たちが、物語から締め出されることを受け入れられない。都市の騒音が、都市を浮かせている人生の騒音をかき消すことを受け入れられない。

ニューヨークは美しい。だが、無垢ではない。

これらのページは、それを言うための私のやり方だ。何も砂糖でくるまず、真実を一オンスも削らず、誰の許可も求めずに。

ーナンド

Ferdinando Frega